【詩集】もがりぶえ

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【詩集】もがりぶえ

【Ｎコード】
Ｎ６６５３Ｚ

【作者名】
布袋しぐれ

【あらすじ】
布袋しぐれの詩集、第３弾。いつもご愛読ありがとうございます。徒然と心の赴くままに、書き連ねるこの詩集。どうぞお楽しみください。今回も詩集の題は、私の生まれの季語からつけさせて頂きました。

我が儘な愛

そう
初めてじゃない
数え切れない
恋の海
ダイブして
その切なさに溺れて
私がサーファーなら
いつになっても
波に乗ることをしらない
素人で

いいえ
分からない
覚えていないくらい
繰り返してる
お遊びめいた
この恋愛を
ねえ誰か
うまいこと並べて
おしゃれなジャズでも頂戴
おまけに思いっきりキツイ飲み物を

よく占いで出る
『浮気の恋に燃える』私
占いどおりね

人のモノが一番
良く見える
無いもの強請り
やめたいけれど
どうやらそこまで
私
賢くないみたい

そう
ほしいのは
温かなハグ
何度目の恋かしら
胸の高鳴り
抑えられそうも無いの
そう
こんなに隙を作ってあげているのに
こんなチャンスふらないで
ささげる愛には飽きたから

誰か私を嫌と言うほど
愛して頂戴

温かい季節

夢から
今なら醒めても
後悔しないかもって
いつかのプリンセス
まだ毒のリンゴ
吐ききれてないみたいね

こんな季節に
あわてて準備なんかして
もっと早くからするんだったって
どこかのサンタのおじさん
外ではトナカイが待ってる
暇を持て余しているみたいね

赤と緑と白と
派手な色合いにその身を包んだ
街
綺麗なネオンの遠く
幸せな声が聞こえる

そんなに慌てて
流れていく星たち
煌いて光を放って
私もあんなに輝けたら良いのに

星たちに嫉妬してるみたいね

今
街中は温かな幸せに囲まれた
温かい季節

戯言

気まぐれに
呟いて
あなたへの
空虚な告白

いないあなたに
届かない声は
無意味なのに
どうしてこんなに
唇に乗せたい音なんだろう

まるで麻薬のような
媚薬のような
温かい言葉
ほしい愛もままならないのに
ほしい愛も手に入らないのに
どうして
辛くないんだろう

心にぽっかり開いた穴は苦しくて
痛くって
葬り去ろうと
私の頭

考え付いたみたいね
ああ
まるで人形みたいに

さあ
求めてよ
求めるままに
甘美に
優雅に
時に大胆でふしだらに
舞って差し上げましょ

嘘でいい
憎いあなたでもいい
私に
愛していると
囁いて

聖なる

こんな冷たい
嘘つきピエロみたいな
風に吹かれて
聖なる夜に
生れ落ちる命は
まるで
あなたのようね

汚れなき
あの雪のように
しずしずと
綺麗に
降り積もって

こんなに冷たい夜は
まるで冗談だと
告げてるみたいに

感傷にひたるためにあるみたいな日
なのに人は
会い
楽しむ
楽しげな声
楽しげな姿

街中は綺麗に
ペイントされて
キライじゃないけれど
一人じゃ歩きたくない
関係ないことも
考え込んでしまいそうだから

キライじゃない
すきでもない
このイヴの日に
願い事はただひとつ

口実

よく言うよ
お前は中々口達者だ
そういうお前もよく言うよ

そうやって酒を飲み交わす
大人たち
上手い事言って
こんなご時勢だから
ちょいと
引っ掛けようっていう
魂胆でしょう

上手いこと言ったな
お前も上手いこと言ってきたんだろう
そういうお前は何て言ったんだ

そうやって言い訳の口実を探しあう
大人たち
どうやって言い逃れてきたのか
ありきたりだけれど
次の口実

しきりに探してる
新しい口実探して

サンタも忘れた
疲れた大人たち
そうね
おねだりするなら
口実を考えてくれるものがいいんじゃないかしら

課長に呼び出されちゃって
いや後輩が仕事でな

言い訳口実
たまには正直に

飲みたかったのさ

そういってもバチはあたらないんじゃないかしら

ディア・パトロン

親愛なるあなたに

叶えたい夢があるの
ひとつじゃない
ふたつ
みっつ
数えていたら
多分キリはないわ

小説家になりたい
一番強い射撃の名手になりたい
有名になりたい
世界中をめぐって
それを本にしたい
絵を描いて
アトリエだって持ちたいし
それを画廊に飾りたい
ダンスも好きなの
歌も好き
いつか大きな舞台で
ミュージカルにも出たい

夢がいっぱいあるの
数え切れないくらい

エゴな夢ばかりじゃないわ

いつかあの団体に
莫大なお金を寄付して
名前を名乗らずにおいてみたいわ
かっこいいじゃない

だからそこまで儲けなくっちゃ
頑張らなくっちゃ

初期投資って痛いのよね
誰か手伝ってくれない

ねえ
親愛なるあなた
私の才能に賭けてみない
あなたが出し惜しみすることなく
協力してくれるというなら
私はあなたに
私の与えられるもの全てを
差し上げてよ

強く

少しでも
強くありたいと願うのは
少し
悲しいちっぽけな
意地のせいなのだろうか

踏みにじらないで
このまま
私は
私らしく夢を抱いて
歩いてゆきたいの
邪魔をしないで
誰も

許されない
真実は
甘い果実みたいに
人を誘うから
そんな誘いを
人は罪という

罪など無い
あるのは幾多の罠だけ
かかって

落ちて
そして
それを罪と言って
勝手に
悪い扱い
自分勝手にも程があるのよ

抱きしめて
嘘じゃない
こんな世界中
あなただけが本当の強さだと

あなたの背中だけずっと
追いかけてきたのよ

またあのときみたいに
あなたは
ただの踏み台になるのね

ああ
足りないもの
それは
強すぎる
激しい刺激
それがほしい
強くなりたいから

私こそが
最高だと
エンペラー夢見た
愚かな人間だと思えばいい
けれどいつか
君臨してみせる
この強さで
この鋼にも負けない
信念で

13

まるで記憶のサイクルの中に落ちたみたいな
見慣れた後姿に
胸がドキリとした

名簿につづられた
少し乱れた字
全然予想もしてなかった
知らない人の名に
少し落ち込んだ

この町のどこかに
今でもあなたが住んでいて
再び
会えること
心のどこか
奥深く隅の方で
期待してたの

あまりに幸せ
満たされた日々だったから
頭に張り付いた
この記憶離れないの

初恋の頃
童心に戻ったみたいに
それは綺麗な記憶の底
掘り起こして

懐かしさと共に
こみ上げてくるのは
寂しいな
会いたかった気持ち

今頃
どこかで
元気にしてるんだろうかって
あの頃みたいに
話すことができたらいいのに

初めて好きになって
まるでカーテンの隙間から覗いているみたいに
それは見えづらくって
これが恋というのね

あなたを知って
色づき始めた
１３の頃

貪る愛情

ほしいのは
母のような
献身的な愛情ではない

ただ燃え盛る
業火のような
激しい愛

ほしいのは
父のような
間接的な優しさではない

ただ力強く
後押ししてくれるような
そんな光

ほしいのは
恋人のような
お互いを支えあう愛情ではない

ただ火を噴いて
恐ろしいくらいに

この世を抱く自然のように
力強く
真っ直ぐに
素直で
大きな
愛情

飢えている訳じゃない
そう答えたら
これは嘘

愛されたいなんて
誰にでもあるだろうけれど
私はそれじゃ
満足できないまで
麻痺して
飢えて
ただ欲して

愛して
けれど決して汚さないで
愛して
優しく力強い光の中で
そうして私を導いて

きっとよ

蔑まれて
土足で踏み躙られて
この心
抉られて
生きてきたせいね
呪縛していた
私以外の
輝く女たち
裏側はとても醜かったのに
あらま
隠すのがお上手なこと

長らく
無愛想で通してきたわ
私は無愛想で
ちょっと気取った勘違いレディーみたいに

長らく
笑って無かったわね
あなたの前で
私は気取ることなく
ただ他の女と同じように
笑って話して
ねえ
随分変わったみたいでしょ
けれど
私が剥いだのは
他の女たちと私の仮面

後は貪るだけ
準備は出来たの
数多の愛情が必要よ
罠も餌も何もかも
撒いておいたから
もう心配要らないわ

耳を塞いで

声が聞きたい
あなたの声が

燃え上がるような
こげるような
情熱が
この胸に
ときどき
唐突として燃え上がって
焼けるみたいに
痛いこの胸が
騒がしく鼓動を打つ

うるさい
この胸が騒がしい
静かにして
気付かれちゃうんだ

あの人に気付かれそうなほど
騒がしいこの胸が

裏腹に騒がしい
この胸のうちが

私の知っている私じゃないわね
私の知っている私のいつもと違う
キライじゃないけれど
スキでもない

お願い
静かにして
耳を塞いで
聞こえないフリ
あまりにも必死で
笑えちゃうくらい

耳を塞いで
耳を抱いて
そうして夢を見た

私は耳に針を刺して
針を数え切れないくらい刺すと
頭の歪む錯覚を覚えて
抜かなくちゃ
無意味な夢の中
抗ったけれど
不思議と
中々外れない針に
痛みを覚えて

苦しんだ

心臓がうるさい
鼓動がうるさい
あなたへ向う
この生きている証が
うるさい

蔓延り廃れ

美しくない
面白くない
良いものじゃない

善意じゃない
形が見えない
透明じゃない

ああまるで
嘘つきピエロのみせる
うその世界みたい

何よこれ
同じものに溢れて

どのページをめくっても
ダメ
ダメ
ダメ
これでも芸術家の端くれなの
疑いたくなる

私が憧れた世界は
もっと
妖艶で
美しく
もっと
日本語独特のミステリアスさと
きらびやかさが
あったはずなのに

蔓延る文学に
落胆する
つまらないなあと

そうして古い書籍に手を伸ばし

ああ
あの頃の言葉は
美しかったと

蔓延り
廃れる文学に
嫌気が差したんだ

抱きしめた光

苦しくて
抱きしめたの
暗い
闇の中で
もう何も
見えないから
まるで　そう
目隠ししてるみたい

唄が聞こえる
祝福の唄が
あなたの声によく似た
優しい声

鼓膜の深くに
響くような
優しい
声で
私に囁いて

轟轟
呼ぶ音は
まるで
目を覚ませと

そう　言っているみたいね

苦しくて
息苦しくって
辛く重たい
闇の中
もう全て
終わらせたいから
まるで　そう
永遠の眠りを待っているの

眠り姫でもないけれど
たったひとりの
白馬の主
待っているの

あなただけが
光を持ってきてくれると信じて
救い上げてくれると
信じて

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6653z/

【詩集】もがりぶえ

2011年12月29日05時48分発行